

## 環境に関わるサウンド・アートの研究 : ジョン・ ケージ以降の思想と実

大塚, 姿子

<https://doi.org/10.15017/1654964>

---

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (芸術工学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏名	大塚 姿子			
論文名	環境に関わるサウンド・アートの研究 —ジョン・ケージ以降の思想と実践			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	藤枝 守
	副査	九州大学	教授	岩宮 眞一郎
	副査	九州大学人間環境学研究院	教授	南 博文

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、ジョン・ケージ以降、「サウンド・アート」というあらたな表現領域に関して、環境や生態系と密接に関わるさまざまな作品に多角的に焦点を当てた内容となっている。多様化するサウンド・アートの様相に対して、ケージを基軸に、その影響が、その後、どのような作用をもたらしたのか。あるいは、ケージとは異なるあらたな美学的、実践的な方向が生みだされたのか、数名のアーティストの実践や作品が詳細に分析され、さらには、そこに鳥瞰的な視座が与えられており、ひじょうに充実したものとなっている。

日本では、ほとんど議論されることが少ないアメリカの作曲家、David Dunn における生態系や環境とリンクした実践が詳細に論述されている。とくに、グレゴリー・ベイトソンによる一元論的な認識のシステムやマクルーハンの「反環境」論に言及しながら、Dunn における思想的な背景とともに、松の樹木のなかでのキクイムシの行動から生みだされる音響の実態が明らかにされ、今後の音響生態学における実践がもつ重要性や「サウンド・アート」の展開を方向づける内容を含んでおり、この点は特筆に値する。

ジョン・ケージという実験音楽の祖といえる存在から始まり、ケージ以降の系譜のなかで「サウンド・アート」が生態系や環境との関わりのなかで、近代主義的な「音楽」の概念をはるかに越え、また、われわれの知覚を相対化しながら、社会が抱える現代の諸問題に「音」から解決することの可能性も本論で述べられている。このような社会的なアートのひとつとしての「サウンド・アート」を位置づける方向性は、これからの「サウンド・アート」の実践者や研究者にとって大きな指針となるであろう。

論文調査委員会は、論文審査全般について合議を行い、大塚姿子氏は博士（芸術工学）の学位を授与されるに相応しいと判断した。